

# メーリケの拾遺詩 (1)

— 『詩集』から追放された15篇の詩 —

森 孝 明

## 1. 序

エドゥアルト・メーリケ (1804—1875) が一生の間に作った詩の総数は、少なくとも460篇以上ある。その詩は大きく二つに分けられる。『詩集』の作品とそれ以外のすべての作品、即ち拾遺詩とである。詩人が自ら作品を選んで編んだ生前最後の『詩集』第4版 (1867年) には、226篇の詩 (タイトル数) が収録されている。この『詩集』には、彼が創作した作品の最良のものが厳選されて最終的な姿を与えられており、それ自身ひとつの自己完結した詩集を形成している。『詩集』に収められなかったすべての詩を集めたものが拾遺集として残っているが、この拾遺詩作品は、更に3つのグループに分類される。メーリケは1838年に『詩集』初版を出版した後、第4版まで3度この『詩集』の増補改訂版を出しており、その都度作品に手を加えたり、不満足な作品を削除したり、また新しくできた詩を追加した。拾遺集の第1グループは、『詩集』(1～3版) に少なくとも一度は入れられたが、最後の第4版には採用されなかった詩群である。第2グループは、詩人が個々の新聞や雑誌、それに年鑑などに印刷公表しながら、『詩集』には一度も収録しなかった作品群である。最後の第3グループには、詩人が全くどこにも印刷公表しなかった詩の数々が入っている。

以上の分類の仕方は、ハリー・マインク編『メーリケ作品集』全3巻 (1909年、改訂版1914年<sup>1)</sup>) 以来ほぼ定着していると言っていい。ただし第3グループに属する作品数に関しては、作品集の編者によって極めて差がある。例えば

マインク編では147篇が挙げられているが、ヘルガ・ウンガー編『メーリケ全集』全2巻（ヴィンクラー版、1970年<sup>21</sup>）では260篇、そして最も新しいハインツ・シュラファー編『メーリケ全詩集』（1984年<sup>22</sup>）においては174篇となっているのである。なぜこんなに作品数にばらつきがあるのか。その理由についてはすでにマインクが説明している。<sup>41</sup>

即ち彼は拾遺集第3グループの詩を彼自身の手によって「批判的に校閲された」ものに限定せざるを得なかったのである。なぜなら特にこの第3グループに属するメーリケの詩の大部分を様々の種類の機会詩（Gelegenheitsgedichte）が占めており、個々の友人や知人に寄せて作られた詩の非常に多くがいまだ個人所有の形で散在したままで、なかなか所在を突き止められない。更にメーリケは一つの詩篇をときどき異なった機会に利用しており、しかもその際作品に変更を加えている。また彼は自分の詩の写しをしばしば友人たちに送ったが、その際にも一部を修正したりした。例えば同じ詩が異なったタイトルを付けて伝えられ、それらの詩は日付が付いていないので、「決定稿」を特定することが不可能であることもまれではないのである。

マインクを嘆かせたこの拾遺詩の特殊事情は、その後ハンス・ヘンリック・クルムマッハーによる詩の伝承史及びテキスト批評に関する文献学的作業<sup>51</sup>などを通してずいぶん解明されてはきたが、しかしいまなお不明な部分が少なくない。現在南ドイツのマールバハにある国立ドイツ文学研究所において初の大規模な歴史校訂版メーリケ全集25巻の出版事業が進行中であるが、<sup>61</sup> 第1巻に予定されている詩集は刊行が大幅に遅れている。編集者の一人アルブレヒト・ベルゴルト氏によれば、今世紀中の発行は無理だろうとのことである。<sup>71</sup> おそらく拾遺詩の問題の解決が遅れているためと考えられる。

以上述べたように、メーリケの拾遺詩に関してはいまだ問題が多く、その扱い方が難しい。本論においては、拾遺詩のうち第1グループの作品を考察の対象において、それらの作品がどうして『詩集』から外されていったのかを、詩人の文学観を中心に検討したい。

## 2. 初版から第2版へ

メーリケが編んだ『詩集』(Gedichte)は、初版(143篇, 1838年)、第2版(187篇, 1847年)、第3版(200篇, 1856年)、そして第4版(226篇, 1867年)である。拾遺集の第1グループ、即ち第3版までに少なくとも一度は入っていたが、最終的に第4版から外された詩は、全部で15篇ある。その内訳は、

第2版において削除された詩11篇

初版～第3版にはあったが第4版において削除された詩3篇

第3版に初めて登場して第4版において削除された詩1篇

となっている。第3版において削除されたものはない。

メーリケは初版の出版後ほぼ10年目にやっと第2版を作った。1843年に出版元のコッタ社に初版の売れ行きを尋ねたとき、1000部のうち405部がやっと売れたといういささかがっかりする返事を受け取ったメーリケだったが、それから4年後、なお393部が売れ残っているにもかかわらず、詩人を高く評価していたコッタ社は彼の希望を受け入れて第2版の出版を承諾した。<sup>8)</sup> 1847年5月16日の手紙でメーリケはコッタ社にこう書いている。

「……私は第2版のために新しい蓄えの最良のものだけ (nur das Beste meines neuen Vorrats) を選び出し、また最初の詩集のつまらないものをいくつか (einige Kleinigkeiten der ersten Sammlung) 削除することをもくろんでいたのですが、全体はしかし6～7ボーゲン増えるでしょう。……」<sup>9)</sup>

それから3ヵ月後、第2版の原稿がほぼ完成した8月23/26日、彼は同郷の先輩詩人カール・マイヤーにこう伝えた。

「……9年後に今やっと私の詩集も第2版にこぎつけました。印刷は多分9月に始まるでしょう。いくつかの作品は（特に古典的韻律のものについて詩句論的観点から）改良され、若干の価値のないつまらないものは追放され（einige unwerte Kleinigkeiten verbannt），そして数ボーゲン分の新作が付け加えられました。」<sup>10</sup>

こうして『詩集』第2版は、1848年という出版年号を前もって記されて、1847年11月始めに無事刊行される。初版の残部は廃棄された。第2版に付け加えられた新作は55篇、そして初版からは11篇が「価値のないつまらないもの」として「追放された」。メーリケはいかなる経緯で11篇の詩を追放するに至ったのか。それを探ることは、詩人の創作態度を知るうえで大変興味深い。初版から3年後の1841年に、メーリケは早くも親友のハルトラウプに次のような手紙を書いている。

「最近僕は新しい版を出す場合のために詩集を一つ一つ調べあげ、できる限り慎重に、元の草稿がおおむね持っている良さのために様々の改良を企て始めた。その必要性を一番感じたのは『火の騎士』のロマンツェと『四大』の詩だった。〔…〕この二つの作品は一種の因習的な見方をする友人や知人らには受けが良かったが、そうした見方は間違いなく詩の欠陥に対して僕を盲にし、あるいは部分的に全くはっきりと欠陥を感じたにもかかわらず、僕を安心させ無頓着にさせてしまった。しかもやや古い詩の場合よく起こることだが、一種の伝統に対する尊敬の念が一切の批評を押しつけたのだ。」<sup>11</sup>

この手紙から読み取りうることのひとつは、メーリケがかなり早い時期から第2版への準備を始めていることで、ここにはより完成度の高い作品、より普遍的価値のある作品を目指そうとする彼の強い芸術意志が感じられる。メーリケは詩が生まれるとすぐにしばしば信頼する身近な友人に作品を送った。作品がどう読まれるか、自分の意図が正しく伝わっているかどうかを確かめるためだっ

た。もちろん彼自身の芸術的感性には揺るぎないものがあったが、一方では友人たちの意見や批評に謙虚に注意深く耳を傾けることも少なくなかったのである。特にハルトラウプに対してはそうだった。ここで特に話題になっている2つの作品はいずれもメーリケがチュービンゲン大学の学生時代(1824年)に作った最も初期に属する詩で、最後まで『詩集』に残されたが、折りある毎に手を加えていったものである。こうしたメーリケの詩作の特徴は生涯にわたって多方面に及んでいる。クルムマッハーの言葉を借りて言えば、<sup>12)</sup> 直観の突然の作品化と並んで、メーリケの場合非常に正確な芸術理性による常に新たになされた作業、即ち詩の構想の変更、あるいは一篇の詩を元々のきっかけから遠ざけて普遍的なものへと高める改変 — 内容豊かなテキスト史を作り出す諸現象 — に出会う。こうした作業は様々の手稿から雑誌への最初の印刷を経て、1838年の最初の詩集へそしてそれから1867年の最後の詩集へと進んでおり、その過程を明らかにすることは、多様な観点からメーリケ文学を知るために得るところが多い。

ハルトラウプに打ち明けた詩の改良の計画は、3年後の1844年に、第2版を目的とした詳細なノートにまとめられた。『私の印刷された詩集の第2版のために、何度かの選別に使用されるべき新作並びに改訂された旧作の詩。ノートの後ろに初版の改良すべき作品も付す』がそのタイトルである。マインクによれば、ノートの詩は何度もきれいに訂正し尽くしてあり、詩の上には、詩集の中のどこに挿入すべきかの指示が記されている。またいくつかの詩の横には「詩集には決して採用しないこと」というメモ書きが付いている。<sup>13)</sup> 「最良のものだけ」を詩集に残そうとしたメーリケのきっぱりとした態度が伺える。

こうした準備段階を経て、1847年5月コッタ社の承諾を得た後、メーリケは「初版のつまらないものをいくつか削除」すべく、最終的な詩の選別作業に入る。5月28日、彼は『詩集』から排除すべきものと改良すべきものの指定をハルトラウプに依頼した。何故そんな大事なことを他人に頼んだのかについては、ここで一言しておかなくてはならない。ヴィルヘルム・ハルトラウプはメーリケと同じ歳で、「最初の友」としてウーラハ僧院学校以来新教牧師の道を共に

歩み、後には家族ぐるみの交際を続けた彼の生涯の友であった。それゆえ『詩集』初版の扉に、「我が友ヴィルヘルム・ハルトラウプに／変わらぬ友情のしるしに捧ぐ」という献辞を明記したのである。メーリケの他の親しい友人たち、美学者フィッシャー、作家パウアー、詩人ヴァイプリンガー等とはちがって、彼は父親の跡を継いで生涯牧師で過ごし、文学の世界とは直接関わりを持たなかったが、ピアノが上手く、モーツァルトの世界を詩人に教え、読書を能くし、豊かな芸術的感性の持ち主だった。この友に自作の詩を誰よりも先に送っては感想や意見を求めるのがメーリケの常だった。ハルトラウプは詩人にとって彼の作品の最初の読者にして批評家であったのである。さてメーリケの依頼に対して、ハルトラウプは6月8日に次の6篇の詩を排除するよう提案した。

1. 「ある説教師に寄す」(An einen Prediger)
2. 「牧師聴衆にもの申す」(Pastor an seine Zuhörer)
3. 「新神学的説教の能弁」(Neutheologische Kanzelberedsamkeit)
4. 「埋め草」(Lückenbüßer)
5. 「すべてわれわれのところでのように」(Tout comme chez nous)  
「ねずみとりのおまじない」(Mausfallen-Sprüchlein)

メーリケは最初の5篇については彼の意見に従って削除し、最後の1篇だけは第2版にそのまま残した。次いで6月13日、メーリケは再びハルトラウプに次の7篇も削除すべきではないかどうか尋ねた。

6. 「ナニーの夢」(Nannys Traum)
7. 「尊敬に値する婦人に」(Einer verehrten Frau)
8. 「フロレンティーネに」(An Florentine)
9. 「冷たい仕打ち」(Kalter Streich)
10. 「間違ったやり方」(Falscher Manier)  
「まさかのときの助け」(Hilfe in der Not)

「役人の散文に寄せて」(Auf die Prosa eines Beamten)

これに対するハルトラウプの見解は明らかにされていないが、結果としてメーリケは最初の5篇を削除し、後の2篇を残している。以上の記述はハンス・ウルリヒ・ジーモンの『メーリケ年代記』(1981年)に基づいている。<sup>10)</sup> 2人はおそらく往復書簡の形で事を進めたと思われるが、該当する手紙が未公開のため、彼らの間にどのような意見や削除すべき判断がなされたのかは不明である。ともあれ以上10篇と更に1篇「— に」(An —)が外されて、合計11篇が初版から姿を消した。

### 3. 初版から追放された11篇の詩

削除された11篇のうち「ある説教師に寄す」と「埋め草」の2篇は、古典詩形のディスティヒオン (Distichon) で書かれたエピグラムである。メーリケは1835年頃を境として、それ以前の有韻詩を中心とした詩作に加えて、ヘクサーメターやディスティヒオン、それにゼナールといった古典詩形による創作を開始した。それは「我々の今日の文学の病弱さと苦痛の誇示に対して、古典的形式に合う健康で理想的な素材を心から求める。これのみが、我々が意志に反して多かれ少なかれ引きずっているあの現代の無秩序の状態から断固として身を守るのだ<sup>10)</sup>」という詩人の確固たる文学観に基づく新しい方向であり、メーリケは晩年に至るまでのおよそ40年間にこれらの詩形を用いて、エピグラムや悲歌的な詩や数多くの機会詩を作った。なかでも『詩集』の出る1年前の1837～8年は詩作活動が最も活発になった時期で、古典詩形の作品が急増した。例えばディスティヒオンによる詩は初版に28篇も入っており、先に挙げた2篇の詩もその中にある。(ちなみに第2版に新たに加えられた55篇のうち14篇がこの詩形である。)

エピグラムは、19世紀には風刺文学として、また政治的攻撃の武器として、あるいはまた素朴な平和的な格言的文学として多くの詩人に用いられた。メー

リケのエピグラムは古典の手本に従ってディスティヒョンを用いたものが多く、内容的には教訓性や風刺性の少ない、個人的体験上の形象が中心である。(例えば詩「病床にて」や「夜の書物机」等)更にメーリケの特徴は実にくだけた調子を意のままにしていることで、ヘレニズム調のエピグラムにある戯れ的な機知やフモールをいかに自由にしているかは、例えばインク売りのアーモルの小詩「粗悪品」その他を見れば十分であろう。先の2篇のエピグラムもこうしたメーリケのスタイルを示すものである。

An einen Prediger<sup>16)</sup>

Lieber! ganz im Vertrauen gesagt: Es buhlt mit dem Ehrgeiz  
Deine Andacht: Du trägst Hörnlein, und Satanas lacht.

ある説教師に

ねえ、全く打ち明けた話、君の信心は野心と  
浮気してるよ。君は寝取られ、サタンはニタリだ

説教師の正当な妻、つまり信心が野心と浮気するとは、もちろん崇高なる信仰心と世俗の名誉欲とのからみを比喩的にからかっているのだが、“buhlen”(情を結ぶ)にしる、“Hörner tragen”(妻を寝取られる)にしる、当の説教師自身のプライバシーとは関係ないはずでも、誰かは知らぬ人間を当てこすっているのかと勘ぐりたくなくて、いささか品が無い。おまけに“du trägst Hörnlein”は文字通り訳せば「君は小角をつけている」であり、神の僕の説教師が墮落して悪魔と同じ角をつけたとあっては、サタンは笑わずにはいられないということである。ディスティヒョンの作りに無理があるとは思われないが、現役の新説教師ハルトラウブにしてみれば、教会を嘲笑しているような内容に鼻白む思いがしたのかもしれない。

次の詩「埋め草」はディスティヒョン2個からできているエピグラムで、やはり教会をからかいの相手にしているが、単なる語呂合わせの思いつきの域を

出ていない。詩の作りも後半のディスティヒョンに韻律上無理がある。特に4行目の "denkt Euch" は当然動詞にヘーブンクがくるはずなのに、ペンターメターの韻律上後ろの "Euch" に置かなくてはならなくなっている。

Lückenbüßer

》Hochehrwürdiger Herr 《,so hätt ich gerne geschrieben,  
Aber die Ehre schien mir fast und die Würde zu hoch.  
Euch verdroß indes mein P.P.; doch setz ich es wieder  
Über den Brief ; denkt Euch pater peccavi dabei.

埋め草

「尊き品位高き御方」と私は書ければ書きたかった  
しかし尊きは固く品位は余りにも高く思えた  
一方私の P.P. は君をいらだたせた。でも私はそいつをまた  
手紙の冒頭に置いた。今度は「父よ私は罪を犯しました」を思  
いたまえ。

P.P. とはラテン語の praemissis praemittendis 即ち「先に置かれるべきテーマが先に置かれてあれ」の意で、どんなテーマが受取人にふさわしいかが確かでないとき、手紙の冒頭に昔そう書いた<sup>17)</sup> ことにひっかけて、P.P. から同じラテン語でも "pater peccavi" (父よ私は罪を犯しました) を思えという。尊き品位高き御方の罪の告白をうながしているわけだが、あまり切れ味がいいとは思えない。ハルトラウプが削除の助言をした作品のうち上の2篇を含む6篇(「牧師聴衆にもの申す」、「新神学的説教の能弁」、「冷たい仕打ち」、「間違ったやり方」) は、詩形も内容も異なっているが、どれも教会を揶揄している点では共通している。詩の成立時期が皆不明であるから、それらの詩をメーリケがどのような心境のとき作ったのかはわからない。

メーリケと宗教について詳しいことは別の機会に譲らなければならないが、

13歳の時に医者だった父が死んだ後、伯父が牧師をしていたこともあって、将来牧師職に着くべく、ウーラハ僧院学校、チュービンゲン大学神学部へと進み、卒業後1826年から1843年に健康上の理由で恩給退職するまで牧師を生業とした。しかし一方では学校時代から文学を何よりの趣味と感じて創作を開始しており、メーリケは言わば二足のわらじを履くことになる。しかし友人たちが学問やジャーナリズムの世界へと転身するのを目にして、特に使命感を抱いていたわけではなかった彼は、神に仕える仕事に悩み始め、1年後には教会という「耐え難い頸木」からの解放を求めて、文筆活動に生きようとした。だがジャーナリズムに合わせられない自分の文学的資質を悟り、しぶしぶ牧師館の屋根裏部屋に戻って、「歯ぎしりし涙を流しながら、自分をへとへとにさせるにちがいない昔の食べ物をかみ」<sup>18)</sup>つつ、文学を続けたのである。その後は特に目だった動きはなかったようだが、メーリケは宗教者としてではなく、詩人に生まれついていたと言うべきであろう。それゆえか宗教詩と呼びうる作品は極めて少ない。

ところで、メーリケは自ら子供のように無邪気な性格の持ち主で、彼の作品には子供を対象に描いたものやあるいは子供達に読ませたくくなるような童話的な詩が多い。それに関連して、大変な動物好きでもあり、大人になってからも小鳥や犬や猫等を飼っていたが、そのせいか作品の中には小鳥、こうのとり、にわとり、ねずみ、蜜蜂、蝶、蛙、それに蚊までもが登場する。作品は恋愛詩から童謡風のものまで様々であるが、メーリケは実に軽々とそれら動物に身を置きかえるコツを心得ており、動物との対話やあるいは動物になりきったような動物の視点からの物語詩には、メーリケらしいフモールにあふれた素朴なおかしさやこっけいな面白さがある。

ハルトラウプが提案したものの中の2篇「すべてがわれわれのところでのように」(Tout comme chez nous)と「ねずみとりのおまじない」(Mausfallen-Sprüchlein)はそのような種類の詩である。後者の詩は1832年の作で、「子供が3度仕掛けの周りをまわって唱える」と副題が示す通り、日本の童謡「かごめかごめ」を思わせるような子供達の遊び歌形式である。月夜の晩に猫が仕掛けにねずみをおびき寄せて食べてしまい、「ばあちゃん猫まで踊りだす！」

という無邪気な童謡詩で、もちろんメーリケの創作であろう。彼はこの詩を気に入っていたらしく、友人の助言にもかかわらず、最後まで『詩集』から外さなかった。

助言に従って除外されたのは「すべてがわれわれのところでのように」の詩である。メーリケにはめずらしくフランス語のタイトルをつけており、詩の成立時期も言葉の出典も明らかではない。「動物たちのところでは人間たちのところと同じようになる」という古い寓話の教えを意味していて、内容は鶏たちの世界のことが対話形式でまさに人間の世界同様に描かれている。大意のみを示しておく。

すべてがわれわれのところでのように

最初のめんどり

卵は普通たった1個しか黄身がないのに  
ここにあるわたしのは2つあるのよ!

別のめんどり

あら お隣の奥さん 本当なの  
その卵 きっと 天才を生むわよ

3番目のめんどり

そうなのよ 自然は軽はずみな戯れをしたがるし  
頭が変になることもしょっちゅうあるのよ

おんどり (小声で)

風はどこか他所から吹いてくると思うね  
彼女もう何年も産んでないんだからね  
コケコッコー!

初版から消された11篇のうち残りの4篇は、メーリケの青年期に多い民謡調の4行詩節で書かれている点が共通している。特に「フロレンティーネに」と「— に」の詩は、共に4ヘーブングのトロヘーウス（奇数行）と3ヘーブングのトロヘーウス（偶数行）から成り、前者の脚韻は偶数行のみの押韻、後者は規則正しい交叉韻を用いたもので、内容はからかいと戯れの交ざった愛の歌（Liebeslieder）の一種である。ただし同じ愛の歌でも、例えば「愛のきざし」（1828年）や「少女の初めての恋歌」（1828年）の詩に比べれば、因習的で形象に個性がない。また表題に「～に」（An—）と付けるのは、ある個人にこと寄せてその人の特徴を褒めたりあるいはその人への思いを歌ったりする場合に多く、一方これはまた一種の書簡風の詩によく付けるものでもあって、メーリケの場合その両方が、彼の機会詩とも関連して、特に1840年以後大変増えてくる。その場合特徴的なのは対象とするそれぞれの人をメーリケのまなざしが情愛深くとらえ、かつその人の個性をフモールに満ちた言葉で描いていることである。（例えば「パウリーネに」（1841年）や「ヴィルヘルム・ハルトラウプに」（1842年））そうした中期の詩人からすれば、青年時代の底の浅いからかい半分の戯れの詩を追放するのは当然かも知れない。フロレンティーネの名前も正体不明である。この詩も大意のみ示す。

## フロレンティーネに

おてんば娘さん！ ねえちょっと  
 僕の目をよく見てごらんよ！  
 少しでも君に役立つものは  
 これっぽっちもないのかい？

自分の可愛い姿を君は  
 その中に何度も見て来たし  
 喜んで君はこの鏡の前に

また立ってもくれる

だけど君はもっともっと

これを気に入るべきなんだ

そうすればしまいには

何より愛しいものになるんだから

「ナニーの夢」と「尊敬に値する婦人に」の2篇は、共に副題が示しているように、誕生日に花に添えて贈るという形を取った機会詩 (Gelegenheitsgedicht) の一種である。この言葉は、現実によって刺激され、現実には根拠と基盤を持つ故に自分の詩はすべて機会詩だと言ったゲーテの拡大用法で有名だが、<sup>19)</sup> ここではいわゆる冠婚葬祭などの外的きっかけのために作られる、狭い意味での機会詩のことである。ゲーテの生きていた18世紀には、こうした特定の人物のための詩や私的公的生活上の特定のきっかけのために作られた詩は、一定の社会的評価を得てその地位を確保していた。ただそうは言ってもこの実用文学は、純文学に対しては目的文学として価値の低いものとみなされていた。メーリケの場合、彼の後半生にこの機会詩が著しく多く作られているのである。しかし機会詩の増大は逆にメーリケの創作力の衰弱の印だとみなされて、この分野はほとんど研究対象にされなかった。近年やっと詩人並びに詩人の文学の正しい評価のためには、この機会詩の詳しい研究と彼の文学全体の中でのその位置付けの必要性が認識され始めたのである。<sup>20)</sup> 序で述べた拾遺集の第3グループの大半が機会詩であるだけに、この問題はメーリケ研究の大きい課題である。

メーリケの作った機会詩には慣習になっている様々な機会、公的な祝宴や式典、年度の祝日、誕生日や洗礼、結婚式、葬式、贈り物そして記念帳への記入のための詩等があるが、1838年の詩集初版には4篇しかなかったのに、1867年の第4版では22篇に膨れ上がっている。しかも初版の4篇は、「祝婚歌」(1831年)を除く3篇が削除されてしまった。「ナニーの夢」(1829年)と「尊敬に値する婦人に」(成立時期不明)は第2版から、「ある立派な結婚式に際して」

(1835年)は第4版から。

「ナニーの夢」は、メーリケが4年間婚約をしていたルイーゼ・ラウの姉ヴィルヘルミーネ・デングの誕生日に、彼が書いて贈った詩である。しかし外見上は、3歳の娘のナニーが赤いばらの花に添えてこの詩を母親に贈るという形に仕組んでおり、詩の内容もナニーの見た夢である。母親のために愛らしい花を捜しにでかけるが見つからず、墓地へ行くと天使がいて、真っ白い死のばらが現れ、それを取ろうとすると別の天使が遮って、元気に走って母のところへ帰りなさいというのである。詩は赤いばらを添えた理由付けにもなっているのだが、真っ赤なばらのようにほほを輝かせた健康な子供がそばにいることこそお母さんには何よりの贈り物ですねというメーリケのメッセージが語られている。機会詩を他のものに語らせるという仕組みはメーリケお好みの手法であった。例えば、初めての娘誕生に喜ぶ友人への祝いの詩では、生まれたばかりの赤ん坊が父親にあいさつをしているし(「O.H.シェーンフートに」)、あるいは借りていた本の遅くなった返却の際には、書物自身に遅れた言い訳をさせる(「図書館員アーデルベルト・フォン・ケラー氏に」)。「ナニーの夢」はこうしたユーモラスなやり方で人を楽しませる詩の最も初期のものであるが、墓や悲しい不安な目の天使や真っ白い死のばら、病んだ子といった形象は誕生日の詩にふさわしいとは言いがたく、形式と内容がかみ合っていないように思われる。

「尊敬に値する婦人に」の詩も「誕生日に、花束に添えて」という副題を持つ機会詩であるが、マインク版作品集には拾遺集の第3グループに、「モクセイソウに添えて」と題された異稿がある。<sup>21)</sup> どちらが決定稿か不明だが、いずれにせよメーリケが知人に対して敬意を表する社交的文学のひとつであり、先の「フロレンティーネに」と同様に、鏡のモチーフにしろ、花に託しての女性賛美の仕方にしる月並みで、例えば「機知に富む婦人に」(1843年)や「ある歌姫に寄せて」(1852年)のような切れ味のよいしゃれた言葉と締めくくりの妙に欠ける。

Einer verehrten Frau

zum Geburtstage, mit einen Blumenstock

Man sagt, an solchen Tagen sei es Pflicht,  
Sich selber einen Spiegel vorzuhalten;  
Ich bring ihn dir; verschmäh dies Blümchen nicht,  
Es soll dir deinem eignen Wert entfalten.

Sieh der bescheidenen Reseda Blüte,  
Ein Bild der Menschenfreundlichkeit,  
Die ohne Prunk, voll innerer Herzengüte,  
Den Wohlgeruch der tät'gen Liebe streut.

尊敬に値する婦人に

誕生日に、花束に添えて

そんな日の義務だと人は言う  
我が身を鏡に写すのが  
では僕がそうしてあげる でもこの花は拒まないで  
あなた自身の価値を示してくれるはずだから

つつましいモクセイソウの花を見てごらん  
人間のやさしさの象徴を  
華麗さはなくとも内なる心の善良さに満ちて  
休みなき愛の心地よい香りを放っている

## 4. 第4版から追放された4篇の詩

1856年3月24日、メーリケは第3版のための原稿を出版社コッタに送ってこう書いた。

「新しい版のために、私の詩集の改正した一冊を、添付物と一緒にお送りします。重要でないエピグラム1篇を除いて (Mit Ausnahme eines unbedeutenden Epigramms), 第2版の全作品が保持されたままです。……」<sup>20)</sup>

しかし実際は、その年の秋に出版された第3版には13篇の新作の追加があっただけで、削除された作品はひとつもなかった。

1867年に出版された最後の第4版においては、新たに30篇が加えられ、それと引き換えに4篇の詩が取り除かれた。「散歩のおりに」(Auf dem Spaziergang, 1837年)、「ある立派な結婚式に際して」(Auf eine hohe Vermählung, 1835年)、「愛の詩人に」(An einen Liebesdichter) および「マシカカの歌」(Maschinkas Lied) である。最初の「散歩のおりに」の詩は1837年7月に作られたにもかかわらず、詩集初版にも第2版にも採用されず、第3版に、追加された13篇の中の一つとして収録されたが、しかし結局最後にまた追放の憂き目にあった。<sup>20)</sup> 一方この詩は、1847年5月に(第2版の計画最中)ゴットフリート・キンケルに頼まれて、彼の文芸年報『ラインより』(Vom Rhein)に載せるべく送られたが、掲載されず、同年12月に今度は別の年鑑『貧しい子供達のためのクリスマスツリー。ドイツ詩人の贈り物』第6号(1847年)に、「パッペンハイムのフェルナンデ伯爵夫人への返事」(1840年)と「子供の歌」(1839年)の2篇(いずれも拾遺集第2グループに属する)と共に掲載された。<sup>20)</sup> この雑誌は一種の慈善事業的性格のアンソロジーで、若干の子供用の詩と共に大人のための詩を掲載し、本の収益金が貧しい人々の子供達に役立てられた。従ってこの雑誌には、純文学的性格よりもこの出版事業の目的に賛同する詩人の協

力の姿勢が現れており、当然雑誌の読者への配慮も意識されていた。メーリケはこの雑誌に11篇の詩を載せ、そのうち『詩集』第4版に入れて残したのは3篇にすぎない。「散歩のおりに」の詩はこの雑誌に相応しいものとして公表され、その上で第3版に取り入れられ、そして第4版からは再び排除されたのである。そこにおのずとこの詩に対する詩人の価値判断が働いていると考えられる。

Auf dem Spaziergang

Sie

Vierfach Kleeblatt! Seltner Fund!  
Glückspfand, holde Feengabe!  
Vielgesegnet sei der Grund,  
Wo ich dich gepflücket habe!

Er

Von dem Felde, aus dem Klee  
Wollt ich mir kein Pfand erwarten,  
Gäbst du mir, o schöne Fee,  
Eins aus deinem Rosengarten!

散歩のおりに

彼女

四つ葉のクローバー！ 珍しい発見！  
幸運の証し やさしい妖精の贈り物  
おまえを摘んだ大地に  
お恵みが沢山ありますように！

彼

野原から クローバーから  
何の証しも当てにはしない  
僕におくれ おお美しい妖精  
おまえのばらの園から一本のばらを！

この詩も4ヘーブリングのトロヘウス詩行4行詩節で交叉韻を踏んだ民謡詩節を用いて、メーリケに特徴的な対話形式による青年期に多い愛の歌のひとつである。ここでも自然現象を愛の媒介物として捉え、人物たちを助けて彼らの同一性を獲得させようとする内容だが、クローバーは十分な機能を担ってなく、二人の愛の願いは当たり障りのないものになっている。

残りの3篇は、メーリケが初版から第3版までずっと入れておいたのに最後になって外した作品である。その点では15篇中一番捨て難かったものと言えるかもしれない。「ある立派な結婚式の際に」は第3版において付けられた表題で、初版では「シュヴァルツブルグ・ゾンダーハウゼン伯爵とホーエンローエの皇女マティルデの結婚式に際して」となっていた。<sup>25)</sup> 固有名詞を消すことによってより普遍性を目指したのであろうが、メーリケには珍しく依頼によって作られた機会詩であったことが、この詩を削除する理由になったのかも知れない。すでに述べたように、メーリケは実に様々の機会詩を作ったが、公的祝典のためのものは例外的に少なく、『詩集』に入っているのは「シラー像除幕式におけるカンタータ」(1838年)1篇のみである。機会詩は特定の外的きっかけのために作られるものではあるが、メーリケの詩作は、その外的きっかけが彼自身の内的気分(Stimmung)と一致したときのみ成功した。外面的な動機だけに従ったり、相応しい気分を無理に求めて詩作に向かうことは、彼には不可能だった。このようなメーリケの詩人性は、青年期に牧師をやめてジャーナリズムに生きようとした彼が、注文に応じて期限付で原稿を書くことは出来ないとわかったときに思い知らされた事だった。それゆえ第3版で改正を試みたにもかかわらずやはり追放した裏には、この詩の詩作上の不純性を払拭し得

ない思いがあったとも考えられるのである。

最後の「愛の詩人に」と「マシカ之歌」はやはりメーリケの青年期によく使われたリート調の形式による愛の詩である。「愛の詩人に」は最初コッタ社発行の『教養人のための朝刊紙』（1829年1月10日）に公表された。この新聞は1807年から1865年まで発行されており、この時代の多くの知識人が決定的な影響力を持つ文学ジャーナルとして認めた権威ある新聞であった。当時文学担当編集者であったグスタフ・シュヴァープのお陰で、メーリケは1828年に初めて彼の詩を掲載され、この新聞で言わば詩人としてデビューしたのである。従ってこの新聞に作品が載ることはひとつの評価を得る事であり、「愛の詩人に」の作品はメーリケの自信作であったと考えられる。

An einen Liebesdichter

Von Liebe singt so mancher Mann,  
Damit er auch von Liebe singe,  
Und hebt ein mächtig Klagen an,  
Der Ruhm ist groß, die Pein geringe.

Nun bist du nicht im selben Fall,  
Und lässest auch Gesang erschallen,  
Obwohl noch keine Nachtigall,  
Doch mehr als jene Nachtigallen.

Was wäre denn der Unterschied,  
O Bester, zwischen dir und jenen?  
— Sie singen froh ein traurig Lied,  
Und du ein fröhlichs unter Tränen.

愛の詩人に

愛を歌う者は多い  
愛を歌わんがために  
そして深い嘆きの声をあげる  
名声は大きく苦しみは小さい

だが君はそうではない  
ナイチンゲールならぬ身で  
歌声をひびかせはしても  
あんなナイチンゲールではない

いったい何が違うのだろう  
ああ 君と彼らとは？  
— 彼らは悲しい歌を喜んで歌い  
君は楽しい歌を涙ながらに歌うのだ

愛の文学の真実性がテーマであり、本物と偽物の違いが、メーリケ特有のアンビヴァレントな反対傾向併存の表現によってあらわにされる。愛のなかにある幸せと不幸の分ち難い混合が生み出す独自の気分がエッセンスとしてメーリケの詩に個性をもたらすのだが、この詩ではそれが一種のプログラムのに類型として提出されている故に、例えば「隠棲」（1832年）のような詩に比べて内実の深みに欠けるような気がする。

「マシカカの歌」は「心」への呼びかけで始まる対話形式あるいは問答歌で、20年代の終わりに「風の歌」や「問と答」においてテーマ化された愛の存在への問を形成している。グレゴール・M・マイヤーはこの詩を30年代の終わりにすでに克服された愛の不安定性を問題にしており、この詩自体をとっくの昔に納得いけなくなった例だとしている。<sup>26)</sup>

## 5. おわりに

メーリケが『詩集』最終版に収めた226篇の詩は、初版からの詩が128篇、第2版以後の詩が98篇である。この数字から、青年時代に作られた詩が優遇されていることは明らかであろう。中には最も古い詩「思い出」(1822年)のように、1864年になってやっと最終的な姿を得た作品もある。それだけ作品に愛着を持っていたとも考えられるが、詩人は出来る限り完全を目指して言葉を吟味し、何度も詩に磨きをかけていったのである。それにもかかわらず、追放された15篇の詩はすべて1837年以前に作られたものである。これらの詩にもメーリケは手を加えて改良の努力を惜しまなかったが、「最良のもの」になりえなかった故に「重要でない」そして「価値のないつまらないもの」として排除せざるを得なかったのであろう。メーリケは第4版に初めて各詩の成立時期をハルトラウプの助けを借りて明記した。というのはメーリケは自分の詩の出来た期日に無とん着だったが、ハルトラウプは送られた手紙と共に詩の日付を記録していたからである。このことは、詩がいつ出来たかではなく、どのくらい完成度の高い作品になっているかがメーリケにとって大事であったことを伺わせる。1841年に詩人が書いた言葉は、彼のすべての文学に当てはまる基準だったのである。

「……形式はしかしその最も深い意味において内容と全く不可分だ、それどころか形式の根源においては内容とほとんどひとつだ。〔…〕それ故形式は可能な限り完べきで無ければならない。〔…〕なぜならよい考え、魅了する形象、精神などは他のものも持ち得る、しかしこれらすべてを調和ある、ずれることのない完結した形式に入れて我々に快く再び与えること、それが詩人の特権であり、それが本質的にいつの時代にも通じる詩人の資格であり価値なのだ…」<sup>27)</sup>

註

- 1) Mörikes Werke in 3 Bdn. Hrsg.v.Harry Maync. 2. Aufl. Leipzig u. Wien 1914.
- 2) Eduard Mörike: Sämtliche Werke in 2 Bdn. Hrsg.v.Helga Unger und Jost Perfahl. München 1967-70.
- 3) Eduard Mörike: Sämtliche Gedichte. Hrsg.v.Heinz Schlaffer.1984
- 4) Harry Maync: Mörikes Werke in 3 Bdn. Band 3 S.232.
- 5) Vgl. Hans-Henrik Krummacher: Zu Mörikes Gedichten. In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 5 1961 S.267～344. 並びに同氏の Mitteilungen zur Chronologie und Textgeschichte von Mörikes Gedichten. In : Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 6 1962. S.253～310.
- 6) Eduard Mörike: Werke und Briefe. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Hrsg.v.H-H.Krummacher, Herbert Mayer, Bernhard Zeller. Stuttgart 1967ff. [ bisher 11 Bände ]
- 7) 筆者が1991年5月に Marbach で会った時のことである。
- 8) Harry Maync: Eduard Mörike. Sein Leben und Dichten. 3.u.4.Aufl. Stuttgart u.Berlin 1927 S.322.
- 9) Eduard Mörike: Unveröffentlichte Briefe. Hrsg.v.Friedrich Seebaß. 2. Aufl. Stuttgart 1945 S.200.
- 10) ibid. S.203.
- 11) Harry Maync: Eduard Mörike. S.322.
- 12) H-H.Krummacher: Zu Mörikes Gedichten. S.268.
- 13) Harry Maync: Eduard Mörike. S.323.
- 14) Hans-Ulrich Simon: Mörike-Chronik. Stuttgart 1981 S.179f.
- 15) Eduard Mörike: Briefe. Hrsg.v.Friedrich Seebaß. Tübingen 1939 S.397.
- 16) Eduard Mörike: Sämtliche Werke in 2 Bdn. Band 2 S.363. 以下同じ。
- 17) Eduard Mörike: Sämtliche Gedichte. S.537.
- 18) Eduard Mörike: Werke und Briefe. Band 11, Briefe 1829-1832.Hrsg.v.

Hans-Ulrich Simon. 1985 S.21.

- 19) Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe*. Wiesbaden 1955 S.45.
- 20) Renate von Heidebrand: *Kunst im Hausgebrauch*. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 15 1971 S.281f.
- 21) Harry Maync: *Mörikes Werke*. Band 1 S.317.
- 22) Eduard Mörike: *Unveröffentlichte Briefe*. S.293f.
- 23) マインクはこの詩が初版から第3版まで詩集に収録されていたと記しているが、これは明らかに間違っている。Vgl. Maync: *Mörikes Werke*. Band 1 S.478.
- 24) Hans-Ulrich Simon: a.a.O. S.182.
- 25) Harry Maync: *Mörikes Werke*. Band 1 S.478.
- 26) Gregor M. Mayer: *Mörikes Liebeslyrik*. Kaufering 1989 S.188.
- 27) Renate von Heidebrand: *Eduard Mörikes Gedichtwerk*. Stuttgart 1972 S.289.